

『氷泥のユキ』

著：朝丘 戻

ill：yoco

木曜夜九時に都内の駅改札口で待ちあわせ——セックス目的で初対面の相手と落ちあうとき、これが適切な時間と場所なのか、俺はよく知らない。

親しいならまだしも、顔も知らない相手とこんな時間から会うのは初めてだ。大学にいて帰宅したあと、仕事に集中していたせいで夕飯を食べるタイミングを逃したけど、仲よく食事しましょうってながれにもならないんだろうな。ホテルにいったって和気あいあいとおしゃべりからムードづくりを始めて、ロマンチックにセックス、って期待もできない。なんせ相手の雰囲気、チャットで話してる段階からそんな感じだった。

大人気SNSの『アニマルパーク』にあるゲイルームで俺が知りあったのは、目つきの悪い白いクマの-avatarをつかっている“クマ”さんだ。アカウント名からして適當すぎるうえ、出会い頭に自己紹介もなく『おまえ寝る相手探してるのか』と訊かれたんだから予想もつく。

——探してる。恋愛抜きで、セックスだけできればいいやって思ってる。

——都合がいい、俺もだ。じゃあ会うか。

嘘じゃない。あれは、嘘じゃない。

それで、会う約束をしてから友だち登録をして、一対一で会話できるプライベートチャットをつかい、電話番号だけ交換した。

『着いてるよ。クマさんって外見になにか特徴ある？』

友だち登録した相手にだけ送れるメール機能の“お手紙”をつかってメッセージを届けた。親指が震えてる。スマホを持ちかえて、掌を強く握る。

ネットで知りあった相手と会うのも初だ。駅構内に響く忙しない足音、電車のアナウンス、行き交う学生、サラリーマン、おじさんお婆さん、男、女、全部の気配に緊張する。

クマさんもこっちを探してるんじゃないかって思うと、四方八方から視線を感じてきよろきよろすることもできなくなる。ビビったって、もう後戻りできないってのに。

『電話する』

届いた返事に、え、と息を呑んだ瞬間、スマホがピピピと鳴りだした。どきっと心臓が飛びだして、ほとんど無意識に「はい」と応えていた。

『——ユキか？』

ぞわっ、とスマホを持っている左手に鳥肌が立った。なんだこのイケメンボイス……！

「うん、そうだけど」

なるべくチャットの自分とおなじように、素っ気ない物言いで返事をする。

『どこにいる。いま改札でるからこっちから声かける』

「あ、そう？ じゃあ、えっと、改札の横にある売店のところ」

『わかった。スマホそのまま繋いどけ』

「おう」

……おうってなんだよ。

“SNSやゲイアプリをつかって気軽にセックスしまくってるゲイ”っていうのがこっちの設定だ。とはいえ、わかんないもんはわかんないからうまく演じられもしない。

てかクマさんもどうなんだよ。名前どおりクマっぽい、でかくてガチムチで髭面のいかにもゲイってタイプを想像してきたのに、イケボすぎるだろ。この声でクマ？ ガチムチ？

絶対恋愛に発展しないであろう、好みと真逆のゲイがいいんだよ俺は。

『おまえの外見の特徴は？』

うわ。声からして好みすぎてどぎまぎするから、スマホを耳からすこし離れた。

「特徴……は、白いボアつきのダッフルコートかな。なかに灰色のカーディガン着てる」

『身長は？ つうか声が若いな。歳は？』

「背は、百七十二、歳は二十歳、大学生」

『ガキだったのかよ』

こいつ、口悪……っ。

「あんたは？ 訊いてばっかいないで自分も言えよ」

『百八十三センチの三十五歳、会社員』

「おっさんじゃん」

『おまえはいままでおっさんとも寝てきたんだろ？』

……そうだった。

「まあね。で、髪型は？」

『いま会うんだから見りゃいいじゃないか』

「なら服装。そっちも教えろ」

『せっかちなガキだな』

「うっせえ」

顔が紅潮しているのを感じながら虚勢を張ったら、そのとき頭になにかが乗った。

驚いてふりむくと、左隣に長身の男がいて俺の頭を覆うように掌をおいている。

「ユキか」

男とスマホから、同時におなじ声が出てきた。……髪型は、左分けのこげ茶ショートカット。眼鏡をかけていて、目も二重で綺麗、唇は健康的な桃色で薄い。

自分の頬がまたさらに熱くなったのがわかって、目をそらした。

「あんた全然クマじゃねーじゃん」

いきなり不躰な態度と発言から始めてしまった。

「人がどんなアバターつかおうと勝手だろうが」

「俺らの業界でクマっていったら、ソウイウの期待するだろっ」

「悪かったな好みじゃなくて。文句あるならやめとくか」

クマさんも呆れたようにため息をついて顔をそむけ、スマホをコートのポケットにしまう。股下までのチェスターコートはネイビーで、なかはグレーのタートルネックニット。私服姿の会社

員って、どんな仕事してるんだろう。大柴さんを思い出す。

「べつに、いいけどさ。クマタイプ以外の人とも寝てきたし」

「ああ、外見なんかどうでもいい。どうせやるだけだ」

いくぞ、と冷たく言い放ってクマさんが歩きだした。躊躇いもなく駅の外へすすんでいく。逃げるならいまだ、と一瞬思ったけど、腹に気あいを入れて心を決めてから追いかけた。

傘を片手に隣へならんで足もとを見おろす。ブーツまで俺のよりサイズもでかくて格好いい。

信号を渡るとき、横顔を盗み見た。風が吹いて前髪が目にかかり、不愉快そうに半分細めるようすが色っぽかった。

……この人が俺の、初めてセックスをする男。

「いちばん肝心なこと訊いてなかったけど、おまえネコだよな」

ラブホテルの部屋へ入って最初に言われたのがそれだった。

「俺はタチしかやらねえぞ」

……一応ネコをするつもりで準備してきたものの、自分の得意なポジションはわからない。

「なら、ネコでいいよ」

「どっちもできるタイプか」

「まあね」

ん？ 決めてない人もいるんだ……？ やばいな、セックスなんて一生できないと思っていたせいで知識も少なすぎる。

「突っ立ってないでシャワー浴びてくれれば。先にどうぞ」

コートを脱いだクマさんが俺の背後にある浴室を顎でしゃくる。

「あ、うん」とこたえて鞆をおき、セックス慣れした余裕の素ぶりを演じながら移動した。

ここにくる前に家で風呂へ入ってきたのに、ホテルでシャワー浴びるのが普通だったのか。シャワーっていうんだから、短時間ですませるべきなんだよな。

震える手で服を脱ぎ、全裸になってひろい風呂でシャワーを浴びた。髪も洗うべきかどうか迷って、べつに頭まで嗅がれることないだろ、と軽く濡らして終わりにする。

……ガチムチのクマじゃなかったから、ちんこでかくないって思っていたいかな。自分の指でほぐしてはきたけど、クマのちんこじゃ挿入らないかもって怖かった。

でもあの人の手、大きかったな。俺の頭をバスケットボールみたいにすっぽり覆った指が、俺のより細いわけがない。ほぐし足りなかったかも。指すら挿入らなかったらどうしよう。

つまらない嘘ついちゃったな……と、何度目か知れないため息が洩れた。だけどバックバーズンだ、って正直に言って探してたら誰も相手にしてくれなかったんだ。どうせ初体験なんか一回だけで、クマさんともこれっきりだろうから、我慢して乗り切れればあとはやっていける。逃げない。ビビらない。ゲイってことを嘆かない。割りきって自分らしく生きていく。よし。

緊張で冷える指を握ってもう一回気あいを入れ、シャワーをとめて風呂場をでた。服を着るのはおかしいよな、と悩んでいたらバスローブがおいてあったからそれを着て部屋へ戻る。

「入ったよ」

「ン」

やわらかそうなソファに座ってスマホをいじっていたクマさんが、こっちへ一瞥もくれずに入れ違いで浴室へ消えていった。

クマさんが座っていたソファの右側をなんとなく躊躇って、左端に座る。深緑色のソファは身体が沈むぐらいふかふかで座り心地がいい。横にあるベッドも広々とした気持ちよさそうなダブルベッドで、まるいかたちをしている。ラブホってこんななんだな……。清潔感もあって小物もいろいろそろっていて液晶テレビも大きくて、さほどいやらしい雰囲気もない。むしろスイートルームみたいな、ちょっとグレードの高いホテルの部屋って感じだ。

自分がラブホへ入る日がくるとも思っていなかった。……クマさんはどうなんだろう。ゲイとしてどんな生きかたをしてきた人なんだろう。このホテルも部屋も、手慣れた感じで選んでくれた。三十五年間恋愛せずにセックスだけ楽しんできたゲイなのだとしたら、俺もそのうちあんなふうになるのかな。

「なにかしこまってぼうっとしてるんだよ」

クマさんも戻ってきた。バスローブから覗く胸板が生々しくセクシーで頭に血がのぼった。

「べつに、やることがなかったから、考え事してただけだろ」

「テレビでも観てればよかったじゃないか」

「ああ、えっと……とくに興味ないし」

「フン、現代っ子か。まあいい、こいよ」

クマさんがベッドの端に腰をおろして、持っていたペットボトルのスポーツドリンクを飲む。俺も唾をごくりと呑みこんで隣に移動した。シーツが冷たい。

喉を鳴らしてドリンクを飲んだクマさんは、やがて白い蓋をくるくるまわしてしめた。指、やっぱり俺より太いけど細長くて綺麗。うつむく目もとで濡れた髪が揺れている。クマさんも髪は半分洗ったって感じだ。よかった、間違ってたなかった。

ペットボトルをベッドサイドの棚におく腕も、筋肉のつきかたが過不足なく綺麗で見入った。……てか、この人に恋人がいなかったって考えるのは無理がないか。

どうやって始めるんだろう、と疑問に思った刹那、こっちをむいて俺を見つめながら身体を寄せてきたクマさんに腰を抱かれ、口に、口をつけられた。

キスされた。

えっ、キスもすんの……!？ 予想外だ、こんなの焦る。

まじか、うわ、とテンパる思いをなんとか懸命に押しとどめて目を瞑り、ファーストキスだ、とばれたくないから唇をひらく。舌もだす。

クマさんの舌も口内に入ってきた。内頬までねっとり舐られて唾液があふれだして口端からこぼれそうになってやばいのに、この人なにを考えてるんだか歯茎まで舐めてくる。上顎も。狂いそうだ、歯もみがいておくんだった、めちゃくちゃ恥ずかしいっ……。

「ン、んっ……」

角度を変えながら散々ねぶられて疲れ果てたところで、やっとクマさんの舌が勢いをなくして

きた。俺の舌を吸いつつゆっくり口を離していく。瞼をあげると、目があった。

「おまえ、まさかキスは好きな奴としかしないとか言うタイプ？」

間近にあるクマさんの訝しげな眉、睫毛、瞳、に思考力を奪われて、息ができない。

「俺キス魔だから、悪いけど好きにやらせてもらうぞ」

べつに、とようやく声がでた。

「べつに、……そんなぬるいこと、言わねえし」

「強がるわりに下手なんだよ」

「へ、下手って言うな」

「下手だ。自覚ないのか？」

「もっと言葉考えろよっ」

俺の顔をじっと見てクマさんが黙る。冷淡な目で凝視されていると、自分が秘めている嘘もこの目に一個一個見透かされていっているような錯覚が湧いてきて、そらして伏せた。

「突っこんでイだけのセックスしか知らないってことか。やりまくってるガキの、女みたいな反応も面白いな」

だから口悪いんだよクソ。

「あんた三十五のおっさんと思えないよな」

「巧いだろキス。ああ、下手なお子さまには巧さもわからないか」

「そっちの話じゃねーから」

顎を上むかされてまた口を塞がれた。真っ白になっているうちに、俺の口をこじあけて舌をねじこんでくる。

やっぱない、こいつに恋愛なんかできるわけない。せいぜい外見で好かれて捨てられるタイプじゃね。それで人間不信で恋愛はますますしなくなりましたって感じ？ あー、ありそう。

「……は、」

呼吸のタイミングがわからなくて必死に息を吸った。それでも緊張しすぎてうまく空気を吸えなかった。

ふわ、とクマさんの口から歯みがき粉の味を感じる。態度でかいくせに、ちゃんとケアしてくれる繊細なところもあるんじゃない。はは。ウケる。……でも、俺とキスやセックスをするために準備してくれる人がこの世界にいて、いま会えたのは、ほんのちょっと、本当にちょっとだけ嬉しいな。

「うん……おまえは俺がキスしたらそうやって舌だけだしとけ。余計なことされるとリズムが狂う」

「リ、ズム？」

ほうけている間にベッドの上へ倒された。バスローブの紐を解いたクマさんの左手が脇腹につく。そのまま胸まで撫であげられた。おなじゲイの人に、初めて身体を触られた。

クマさんは唇をまげて、淡泊で無関心そうな表情をしている。『ガキだったのか』と微妙に苛ついていたし、この人こそ俺の年齢や性格や体型が好みじゃなかったのかもしれない。

そう思ったらふいに、上半身を屈めて近づいてきたクマさんに首筋を吸われた。

「ぐ、あ」

変な声が出た。胸にあった手に右の乳首をつままれて、右半身全部が戦慄く。

「あのさ、」

セックスに慣れた感じ、慣れた感じ、と頭を働かせてクマさんの背中に手をまわしてみる。

「私服、で、会社員、って……どんな仕事してんの」

「は？」

「流行の、IT系とか？ 知りあいにもいるよ。結構偉くって、いい人なんだ。尊敬してる」

首筋から喉仏まで舌で舐められた。湿った舌先でかたちをたどるように執拗に舐められて、くすぐったさといやらしさに顔が破裂しそうになる。

「腹の立つ話をするガキだな」

「な、え？」

「それがおまえの片思い相手か」

ただの知りあいだし、話してないと保たねえだけだし。

「黙ってろ。おまえとセックス以外の話をする気はない。俺はおまえに興味もない」

首もとを噛まれて「わぁ」と悲鳴めいた声をあげてしまった。噛み千切られるかと思った。

「怯えすぎだろ」

「あんたが悪いんだよ」

「おまえだ」

舌うちしたクマさんが不愉快そうに俺の左腕を持ちあげて、腋の下に唇を埋めた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>